

佑啓

ゆ う け い

発 行 者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110-1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

大切に思うこと

飯田 俊男

茨城で暮らす兄が、昨年癌の手術をした時の事です。大切なことは、家のパソコンに入れてあるから、もしもの時はそれを見るようにと家族に話していただけあって八時間を超える大手術でした。待合室で長時間待っているのは大変でしたが、兄には申し訳ありませんが、久しぶりに家族や親戚の人たちと話をすることが出来ました。

母方の叔父も来てくれました。叔父は、母のすぐ下の弟になる訳ですが、手術が長くなり、何かあったんだらうか。大丈夫だろうかと動揺を隠せない母に対して、落ち着いた口調で、姉ちゃん。年をとっても親は親なんだ。そんな姿を見せたら子ども達が心配するだろう。しっかりとしない」とびしやり。母も負けじと、子どもがこんな状態で動揺しない親がいるか」と反論。七十八歳の姉と七十五歳の弟の会話である。こんなやりとりがある中、それぞれの職場や家族の事などいろいろな話が出てきました。

父親を早くに亡くした事もあり、兄には父親代わりも果たしてもらい随分と世話になりました。母も同様に、私も万一の事があつたら、かなり心配していましたが、お陰様で兄は退院し職場に復帰してい

ます。新しい施設のこと、お前も忙しただけで、身体には気をつけるよ」と、弟の心配をしてくれるまでに元気になる、まずはひと安心です。母を論してくれた叔父からは、帰る際、仕事はどうだい。いろんな人がいると思うけれど、自分の家族だと思つて大切に



もう一人の足の不自由な叔父が居て、この叔父も自分達兄弟をかわいがってくれ、障害のことなど意識する事なく私も叔父が好きでした。母の実家は、みんな良い人達で居心地が良かったのを覚えて

います。大切に差し上げなさい」の言葉は、叔父としての立場と、もう一つは障害のある人がある家族の立場での言葉になる訳で心に沁みました。

私がよく母の実家に遊びに行つたのは、今から約四十年前近く前、私が小学三年から四年の頃だったと記憶しています。約四十年前と言え、鶴舞荘が千葉県ではじめて身体障害者療護施設として運営

を開始した頃です。障害に対する社会の理解もままならない時代でもあり、関係者の皆さんは相当ご苦勞された事でしょう。

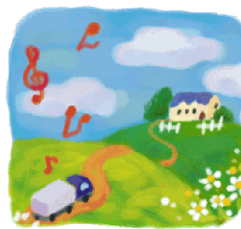


さて、このたび当法人が、千葉県身体障害者療護施設「鶴舞荘」を引き継ぐ形で障害者支援施設「ふる里学舎静風荘」を開設させていただきます。身体障害分野での事業実績が浅い我々が、伝統ある鶴舞荘をきちんと引き継ぐ事が出来るのか、不安がありました。昨年十月から佑啓会の職員を研修生として受け入れていただき準備をすすめてきましたが、介護の基礎もままならない状態からのスタートでしたから、かなり現場の方にはご迷惑をおかけしました。厨房に関しても、多様な食形態を覚えるまでは、相当の時間を要する事になり同様にお手数をおかけしました。本当に千葉県身体障害者福祉事業団さんには何かとお世話になりました。そして、長い期間の運営、大変お疲れ様でした。



静風荘は、当初は四月一日開所の予定で準備を進めて参りましたが、しかしながら、建物の完成が遅れた為に、四月から六月までは、県の指定管理という形で、鶴舞荘のまま運営を引き継いでいます。関係者の皆様にはご迷惑をおかけしました。深くお詫び申し上げます。しかし、不幸中の幸いと言うと叱られますが、当初の予定通り四月から新しい施設を運営となった大混乱が起きたと考えます。三

ヶ月の準備期間が持てたことで、様々な面でゆとりが持てました。鶴舞荘での最後のお花見も行うことが出来ました。ここでの桜は見事な咲きっぷりで私たちを十分に楽しませてくれました。また、入居者さんと僅かですが鶴舞荘で過ごせた事は、ほんの少しだけ私たちも鶴舞荘の歴史に加えさせてもらった事になり貴重な体験をさせていただきました。



六月十八日の鶴舞荘から静風荘への引越は、県の担当者・鶴舞荘の元職員さんの協力を頂き無事に終える事が出来ました。一日で引越しを終えるのは困難ではないかとの指摘もあつたが、私自身かなり緊張していましたが、大きなトラブルもなく終える事が出来ました。最後の女性入居者のNさんが、静風荘に到着し、送迎車から降りた瞬間は忘れられません。無事に新しい施設に迎え入れる事が出来た安堵感と、これからしっかり運営していけるかと言う不安感が重なり妙な感覚でNさんを見ていました。

長」と、Aさんが言つて下さいました。他の入居者の皆さんも同様に、いろいろとアイデアを出してくれたり、若い職員を励ましてくれたりと、職員・利用者の絆を超えて、これからみんなで良いものを作り上げようと言った感じで準備を進める事が出来ました。もちろん課題は山積みですが、これからも皆さんに助けていただきながら一つひとつの壁を乗り越えていけたらと思っています。



足が不自由だった叔父はすでに他界しておりますが、母の実家ではその存在を隠すことなく大切にされ、玄關脇の一番良い部屋で生活していたのを覚えています。まさに叔父が私に話したように大切にされていきました。家族も障害を意識し過ぎる事もなく何もかもが自然でした。しかし、母は話してませんが、弟のことは、社会の偏見などに苦しんでいたようです。兄が手術を終えた翌日から、母は片道二十キロの距離を自分で車を運転してしばらく病院に通っていました。事故が心配だからやめるように言つても話を聞く人ではありません。おそらくこんな感じ、足の不自由な弟を必死に守ってきた事が伺えます。

力不足ですが、障害を意識し過ぎる事無く、自然な感じで静風荘での生活が成り立てばと思います。

佑啓会に引き受けてもらつて良かった」と、あなた方に会えて良かった」と、利用者さんに思つていただけるよう、真摯にこの仕事に取り組んで参ります。そして私たちもまた、このお仕事をさせて頂いて良かったと思える生き方がこの静風荘で出来たらと思います。

少々大げさな言い方になりますが、宇宙の成り立ちから見れば、この瞬間、この場所で、共に生きている事は奇跡に近いわけですからこの縁を、大切にしたいと思っています。

理事長が常々話をされる利用者も楽しく、家族も楽しく、職員も楽しく」をモットーに、同じ空間を生きている仲間として、生きている喜びを体感できるようにそんな素敵な静風荘が築けたらと思っています。

茨城の実家では、このたびの地震の影響で屋根の瓦が落ちてしまいました。心配で電話をしたら、福島の人を事を考えたら何てことない」と、電話の向こうの母はまだまだ元気です。

こんな時代だからこそ、みんなが元気を出して前を向いて生きていかなければいけないですね。

(ふる里学舎静風荘 施設長)



皆様に支えられ

堀内 則子

圭太が小学三年生も終わるとい
う時に、主人が突然脳内出血
で倒れ長期入院となり、それま
では全然違う毎日となりました
た。それまでは圭太のことは全
て私がすべばいいと思っていま
したから、療育手帳の申請すら
しておらず制度など一切何も知
りませんでした。

主人の代わりに私が働かなく
てはいけません。でも圭太のこと
はどうしよう：：小学校も特殊
学級のある学区外で、毎日送迎
しなくてはならないし、私もボ
ランティアの人を探したりしま
したが、やはり毎日のこととな
ると、中々引き受けてくれる人
がいませんでした。

でもそんな時、同じクラスの
お母様たちが圭太を送ってくれ
たり、いろんな制度を教えてく
ださり、そこで初めて「ふる里
学舎」を知ったのでした。早速、
そのお母さんに付き添ってもら
い、アネッサデイセンターへ行
きました。その時に話を聞いて
くださった洲上先生はすぐに
「お母さん大丈夫」「学校へ迎
えに行つて放課後お預かりしま
すよ」と言ってくださり、本当
に助かりました。初日、圭太が
お迎えのバスに乗って泣かずに
アネッサデイセンターで過ごし
てこられるのか、すごく心配し
ていました。そんな心配は必
ず、初めての場所でも泣きも
要なく、初めての場所でも泣きも
驚きませんでした。そして、私自身も
慣れない仕事で迎える時間ギリ
ギリになり「すみません。今向
かってますので」と連絡を入れ

ると、「大丈夫！」「大丈夫！」
「それよりお母さん気をつけて
来てね」と言ってくださり、何
よりも、今まで圭太のことを相
談できる人がいなかったのです
が、迎えの時のほんのわずかな
時間でも、ちょっとした圭太の
相談ができて本当に心強く思
いました。

夏休みの利用も考え、お友達
のお母様とふる里学舎（今富）
へ見学に伺い、そこでも充実し
た施設とニーズに合ったサービ
スに二人とも驚きと安堵を感じ
たことを覚えております。それ
までは、とにかく圭太を預かっ
てもらえる所と預けていました
が、圭太の将来を考えさせられ
ました。圭太も中学生になり、
中学からは市
原特別支援学
校へ。その頃
になると、たまに
「今日、学校行
かない」と言い
出し、そのくせ
アネッサには
行くと行って、
駄々をこねる。



高等部になり作業実習でふる里
学舎へ行った時のこと、アネッ
サの児童と支援員さん達が圭太
の作業場近くにいたそうです。
圭太はみんなを見つけて、駆け
寄ったそうです。「圭太さんは
今日はお仕事にきているのでこ
ちらに来てはいけません」と注
意しました。でも頑張つて働く姿
を見ていて、目が合うと、こち
らが手を振つてしまつて、いけ
ないなあ」と宮崎さんから、そ
のときの様子を伺い、とても温
かい気持ちになりました。

そして、そんな圭太も今年の
四月より、ふる里学舎の里山科
へ。いつ「今日行かない」なん

て言い出すのではと心配してい
ましたが、毎日、楽しそうに通
っています。

七月の家族会の旅行にも初め
て参加させて頂き、参加者の多
さにびっくりしました。それと、
その大勢の中、いろんな方から
「圭ちゃん」と声を掛けられ、
職員の方や利用者の方、私の知
らない圭太の世界があつたので
すね。小学生の時から職員の
方からは、「圭ちゃんいくつに
なつた？十九
歳か。来年は一
緒にビール飲
むぞつ」と圭太
は「うーん、ビ
ール？やだー」な
んて言つてい
ました。さすが
く嬉しそう。私
も圭太がお酒を飲む姿なんて想
像するだけで笑えます。改めて、
もうそんな歳なんだなと思いま
した。たぐさんの職員の方達と
いろんなお話もできて楽しい旅
行でした。是非とも毎年参加し
たいと思いました。



最後にになりましたが、アネッ
サデイセンターの皆様、これま
で大変お世話になりました。こ
れからも、ふる里学舎でお世話
になります。宜しくお願い致し
ます。
(市原里山科 堀内圭太さん母)

原点に帰って

篠田 幸子

「せんせい！」と、かわいい
笑顔が窓口から覗いています。
今年度より市原市福祉会館では、
地域活動支援センターと貸し館
業務に加え、新たに療育事業を

開始致しました。まずは子供た
ちに、ここが楽しい所と思つて
もらえるようにと、館長自らの
こぎりと金づちを持ち、手作り
した遊具が子どもたちに大人気
です。夕方の会館に響く子供た
ちの笑い声を聞きながら、お母
さんのお話をゆっくりお聞きし
一緒に子育てについて考える毎
日です。



私がはじめて言語治療士とし
て就職したのは、愛知県の重度
心身障害者の入所施設でした。
まだ知識も経験もない一年生の
自分に一体何が出来るのだろ
うかと途方にくらえましたが、と
にかく入所されている全員の方
にお会いし、皆さんがどのくら
いことばを理解さ
れ、どのように思
いを伝えられて
いるのかを知る
ことから始めま
した。そこで出会
った一人の女性
(確か同世代の方
でした)は、とても筋緊張の強い
脳性麻痺の方で、発声もままな
らず、かといつて文字で伝える
ことも不確実で、ひたすらじつ
とわたしを見つめていらつしや
いました。唯一の手段はこちら
から声をかけることにイエス・
ノーで答えられるだけなので、
会話は一方的ではすみません。
彼女のじつと見つめる目が、「な



んで分らないのよ」と、言っ
ているようで、とても心苦しく
何とかできないものかと思案し
ていました。

そんな時出会つたのが、ある
研修で知つたサウンズ&シンボ
ルズという三十二個のシンボル
なシンボルマークによるコミュ
ニケーションでした。これは今
から三十八年ほど前に、オース
トラリアで発語困難な脳性麻痺
児のコミュニケーション手段と
して考案されたものです。たつ
た三十二個のシンボルなので、
一つのシンボルの指す意味は幅
広く、聞き手の推測力も重要で
はありますが、この手段を彼女
に使つてみたところ、今までの
思いがせきを切つたように彼女
の中から溢れ出し、生き生きと
語り始めました。日常の出来事
だけでなく、施設の改善点や、
政治の話まで、自分の意見をき
ちゃんと持つていらつしやるこ
ともわかつてきました。そんな彼
女が、あるテレビの取材で、私
を障害者扱いしないでほしいと
いう思いを熱
く語りはじめ
ました。そんな
ことを考えら
れていたとは
つゆ知らず、そ
れは私にとつ
ても大きな衝
撃と感動でし
た。



その後主人の転勤に伴い、横
浜、川崎、市原、袖ヶ浦と転々
としながら、様々な療育機関で
多くのお子さんご両親にお会
いしてきましたが、彼女との出
会いが、今でも私の原点です。
どんなお子さんに出会つても、
まずはそのことばや思いに耳を
傾けることの大切さを彼女は教

えてくれたのです。
療育での関わりは、お子さん
にとつては、生活のほんの一部
であり、ここで築ける関係はさ
さやかなものではあります。が、
人と通じ合える楽しさを感じて
もらえることを大事に思ってい
ます。

最近では、基本的な言葉の力は
あるけれど、人との関わりに難
しさを感じている高学年のお子
さんとのお付き合いも増えてき
ました。自分に自信が持て、自
分も人も大事に思える人に育つ
てほしいと思います。自立に向
けてのお手伝いが出来るよう、
私自身学び続けていきたいと思
います。

「明日も来たい！」そんなか
わいい声に私自身元気をいただ
きながら、お母さんに少しでも
元氣を持ち帰つていただけるよ
う、今日も笑顔で館長とお見送
りしています。

(市原市福祉会館 言語聴覚士)

編集後記

震災からすでに五ヶ月。復興
のニュースは徐々に聞こえてく
るものの、忘れてはならない、
様々な思い・・・一日でも早
く被災地の方々が「日常」に戻
れることを祈りつつ・・・。

例年以上に節電を意識しなが
ら、冷房のありがたみを感じ
ると共に「当たり前」の大切さを
再確認する夏となりました。皆
さんも夏バテと熱中症にはお気
を付け下さい。市原から佐啓七
十七号をお届けします。
越川 直人